

自然誌 だぶり 春

Natural history

三重自然誌の会情報誌 148 号

2026年 6月

鳥羽市指定天然記念物『坂手のアヤメ池』について

鳥羽市坂手町にある『坂手のアヤメ池』は、1969（昭和44）年11月21日に鳥羽市の天然記念物に指定されています。坂手島には何度か訪島しているのですが、花が咲く時期に行ったことがなかったので、2026年5月16日に『坂手のアヤメ池』を見に行きました。

佐田浜港から市営定期船に乗船すると、10分ほどで坂手港に到着します。アヤメ池は浅間山の中腹にある小さな池です。以前に訪島した時には、覆い被さる草木を掻き分けながら歩いた記憶がありますが、道中は草刈りがなされていました。アヤメ池は、南北方向に約20m、東西方向に約10mの大きさで、擬木杭とロープで囲まれていました。周囲の高木は伐採され、アヤメ池に日光が十分照射する環境に管理されていました。また、付近には解説看板も整備されていました。アヤメ池は、池と名がついていますが、なみなみと水が溜まっているのではなく湿地帯になっていて、周囲にはミゾソバが生え、池一面にはカキツバタが生育して紫色の花が綺麗に咲いていました。



写真1 坂手のアヤメ池とカキツバタ

（中野 環：度会町大野木1711-1）

東員町のアカボシゴマダラとゴマダラチョウ

中 西 元 男

関東から侵入分布拡大する外来種、アカボシゴマダラは三重県でも川越町での新記録以来分散が顕著で、いなべ市、菰野町、桑名市、四日市市で記録され、津市からも複数例が報告された(大島2026)。筆者は、未記録の東員町でも幼虫を目撃、撮影しているので報告する。

若齢幼虫数頭目撃（一部撮影・写真1）員弁郡東員町城山，2025年10月25日

幼虫がみられたのは城山多目的グラウンドの城山球場を囲むフェンスの外側。フェンスに沿ったアラカシなどが主体の植え込みとの間に人一人通り抜けられる程度の空間があり、幼虫は植え込み側から伸びた、膝丈程度の何ヶ所かのエノキ幼木葉上に静止していた。



写真1 アカボシゴマダラ幼虫（2025年10月25日，東員町城山）

この場所は、成虫（蝶）の産卵飛翔空間としては暗く窮屈そうに感じられたが、同場所のエノキ幼木1本からはアカボシゴマダラと同属近縁の在来種、ゴマダラチョウの幼虫2頭も目撃された。ゴマダラチョウの幼虫はアカボシゴマダラに比べてズングリしており、背

面の鱗状突起1対だけが大きく目立つことで、容易に区別が可能である。アカボシゴマダラの本邦へ侵入以来、ホスト選択上の両種種間関係として在来種ゴマダラチョウが大木を好み、アカボシゴマダラは幼木に産卵する傾向が高いとされてきた。

アカボシゴマダラはタテハチョウ科としては緩やかに飛翔し、ゆっくりした飛び方の有毒マダラチョウ類に擬態していると言われている。一方ゴマダラチョウは、コムラサキ亜科本来の敏捷な飛翔をみせる種で、空間によく枝を張ったエノキ大木梢を活発軽快に飛び回り、占有や産卵行動する姿が印象に強い。アカボシゴマダラは、ゴマダラチョウに混じてエノキ樹上を飛び回る様子も観察されるが、込み入った樹林内でゆるやかに舞っているのをみかけることもある。

ために、ゴマダラチョウに関しては特にこのような狭く窮屈な空間に潜り込んで産卵するイメージが湧きにくいのであるが、葉上生活する幼虫にとって、鳥のような捕食天敵から身を守るには好適な環境なのかもしれない。

アカボシゴマダラ＝幼木、ゴマダラチョウ＝大木が食餌資源を巡るニッチのシェアとする考え方もあるようだが、両種が競合する日本の本州の大部分において、ホストのエノキは都市部から山域どこにでも極めて普遍的な樹種で、規模の大きなものも少なくない。その葉の、幼虫食餌としての資源総量は、例え同植物を同じくホストとするオオムラサキ、ヒオドシチョウ、テングチョウ（その他食葉性競合昆虫類）を加えてさえ必要十分であり、資源を巡る競争はさほど熾烈なものではないだろう。

なお、城山多目的グラウンドの一角には、アサギマダラを誘致する目的の栽培フジバカマ園があり、そこには本県で絶滅が危惧されるツマグロキチョウのホスト、カワラケツメイも植栽されている。筆者はこの両種の動向に着目し、数年前から度々同地を訪れているが、これまでアカボシゴマダラをみかけたことはない。本種の同地への侵入はまだ近年のことと思われる。

文献

大島康宏2026. 三重県における特定外来生物とされるアカボシゴマダラ（昆虫綱；チョウ目）の記録について。三重県総合博物館研究紀要，(12)，15-20.

（なかにし もとお：松阪市新町959）

ミゾゴイを大紀町と大台町で確認

宮 島 美 栄

2026年4月18日午前11時頃、大紀町から南伊勢町に抜ける峠道の大宮紀勢トンネルを出たところで、車の前に一羽の大きめの鳥が降り立った（写真1）。全体が見たことのないエンジ色で、羽はその濃淡でツートンカラー。キジほどの大きさだけど立ち姿は横長ではなく縦長な感じ。でもサギではない！ではこの鳥は？しばらく（といっても写真を1, 2枚撮れた程度）留まっていたが、すぐに谷の方へ（下方向）飛んでいった。

大杉谷自然学校の井元俊介氏（本会会員）にラインで尋ねたところ、「ミゾゴイ」です、記録を教えてくださいとの回答だった。発行されたばかりの三重県レッドデータブック2025を確認したところ情報不足（DD）にカテゴライズされている種であった。本会の山本和彦氏の仲介で、自然誌だより96号に「ミゾゴイ受難」、同121号に「ミゾゴイの巣立ち」等の記事を報告されている今堀聖史氏に確認していただいたところ、やはりミゾゴイ *Gorsachius goisagi*（ペリカン目サギ科）で間違いないということであった。今堀氏によれば、ミゾゴイは4月に繁殖のため渡来し、薄暗い谷や沢沿いに営巣、朝夕に活動し、警戒すると擬態し微動だにしなくなるらしい。それらの事から分布は全国に及ぶも目撃され難く、それ故の「DD」なのかもしれない。

幸運は続くもので、4月29日午前9時過ぎ、大台町久豆の大和谷へ向かう宮川ダム湖沿いの道で、また遭遇することができた（写真2）。ちょうど井元氏と軽トラで移動中だったので、ミゾゴイの後をついてしばらく観察することができ、写真もたくさん撮れた。

最初目撃した時に、喉がブヨブヨと動いてたので、何かを捕食してたのか、と思っていたのだが、二度目の遭遇でじっくり観ていると、食べて喉が動いているのではなく、井元氏によると一種のダンスみたいに首をくねくね動かしているらしい。正面から見ると首には細いネクタイをしているような黒い線がくっきり見える（写真3）。首をくねくね動かすのは擬態行動による筋肉の強張り等をほぐす体操的なものではないか、と私は推測している。またミミズが好物らしく、捕食場面も捉えた（写真4）。

大紀町と大台町で遭遇したミゾゴイたちがここ三重で繁殖し、個体数を増やして欲しいと願うばかりである。

同定ならびに仲介していただいた今堀聖史氏と山本和彦氏、同行・写真提供者の井元俊介氏にお礼を申し上げる。



写真1 最初の遭遇、車の前に降り立ったミゾゴイ(2026年4月18日、大紀町柏野)



写真2 再び遭遇したミゾゴイ(2026年4月29日、大台町久豆、井元俊介撮影)



写真3 正面からは黒い細いネクタイのような線模様が見える（同）



写真4 ミミズを捕食（同）

（みやしま みえ：大台町上三瀬52-1）

三重県の海岸に打上げられたヤクシマダカラについて

中 野 環

ヤクシマダカラは、潮間帯から水深20mの岩礁やサンゴ礁に生息するタカラガイです。温帯域での越冬は難しいのか、これまでは三重県の海岸に幼貝は時々打上がるのですが、成貝は十数年の間に1個体しか目にすることはありませんでした。ところがここ数年、紀北町から志摩市にかけての海岸を歩くと、軟体部が残った状態で打上げられるヤクシマダカラが目につくようになりました。

貝殻が割れていない個体だけではなく、貝殻に小さな穴が開いた個体や大きく割れた個体も拾い集めると、成貝のサイズに違いがあったり、貝殻の同じような箇所が破損していることに気がつきました。そこで、2025年1月1日から2026年3月31日に収集した100個体について、貝殻のサイズと貝殻のどの箇所が破損しているかを観察しました。

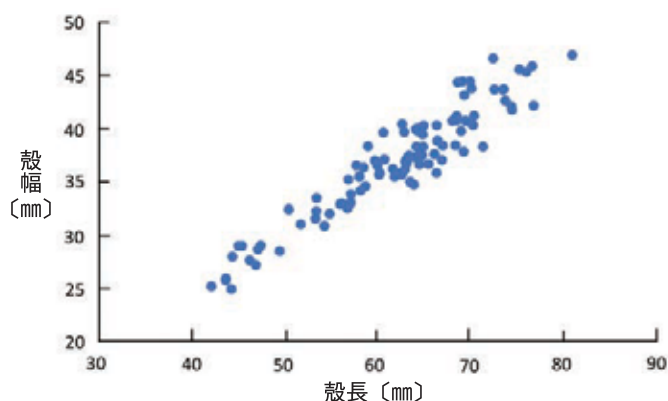


図1 三重県産ヤクシマダカラの貝殻サイズ。

表1 貝殻の破損箇所。

割れの度合い		割合(%)
割れ無し		65
後部に小さな穴		12
後部に割れ		14
中央部割れ		3
後部～中央部に割れ		2
前部～中央部に割れ		1
全面に割れ		3

100個体の最大個体は殻長80.15mm、殻幅47.34mmもあるのですが、最小個体は殻長43.67mm、殻幅26.96mmで、殻長の差は36mmほど違いがありました。平均殻長は62.58mm、平均殻幅は37.99mmでした（図1）。手持ちの図鑑では、殻長は7～8cmとあるので、今回、三重県の海岸で繁殖している個体は全体的に小さいようです。貝殻が小さいのは水温や餌の量が影響しているのでしょうか。

貝殻の破損について観察すると35%の個体が破損していました。後部の破損が26%、前部または後部から中央部の範囲の破損の割合は9%で、貝殻の後部が破損した個体が多いことがわかりました（表1）。貝殻の後部の殻頂付近に5mm程度の小さな穴がある個体は12%で、穴は先端が鋭利な道具で突いた



図2 殻頂付近の捕食痕。

時にできるような形状をしています。小型の鳥が嘴で突いたときにできた捕食痕かもしれません。また、後部が大きく破損している個体は14%あり、やはり殻頂付近が破損しています。破損部分は薄質なので、海岸に打上げられた時に破損した可能性はありますが、破損部分から見える軟体部に食いちぎられたような痕跡が認められる個体もありました（図2）。実際に鳥類がヤクシマダカラを捕食している現場は確認していませんが、貝殻の薄い部分を選択的に狙い捕食していることが想像されます。今後、海岸で鳥類の行動を観察してみようと思います。

（なかの たまき：度会町大野木1711-1）

アリスイ顔末記

上 田 利 彦

熊野市井戸町の畑に設置しているトレイルカメラに見慣れない鳥が一瞬映り込んでいました。日付けは2026年2月15日、フレームの隅っこに写り込んだ姿は不鮮明ながら、黒い過眼線と背中が明るい灰色、端部に黒い線と翼は茶褐色という特徴ある姿であること分かります(写真1)。動画でも一瞬映り込んで飛び去ってしまったのですが、フィンチのような嘴で、何となくずんぐりむっくりした体型のようでもありました。



写真1 撮影されたアリスイ(2026年2月15日, 熊野市井戸町伊豆明神)

さて、自分の思いつく範囲であれこれ考えました。まずこの配色に思い当たる

鳥は思いつきません。何かの亜成体で親とは違う配色か?これまで近辺で見かけた鳥はイソヒヨドリが最も多く、ヒヨドリ、ムクドリ、コジュケイで、あとウズラも生息の可能性はありそうです。が、ヒヨドリ、ムクドリは亜成体も知っているので違います。嘴はフィンチに近い感じで、イソヒヨドリも違う気がします。ずんぐりむっくりしていてもコジュケイ、ウズラほどではありません。久しぶりに数冊図鑑を引っ張り出し、似たような鳥を検索してみましたが見当たりません。思いつく種をネットで検索してもこの特徴にはたどり着けず、幾人かの本会会員に写真を送って“これなんでしょう?”皆でコジュケイ?ウズラか?と意見をいただきましたが、決定打は出ずじまいでした。最終的に清水善吉さんから当会会員の今堀さんに写真を転送してもらい、「アリスイ」と同定していただきました。写真とほんの一瞬、飛び去る動きを見てすぐにアリスイと判断していただいたそうです。私はといえば、清水さんから連絡をいただき「あ!そや、アリスイておったな!!」という状況、情けなや…。

アリスイはキツツキ科の鳥で、北海道および東北地方では繁殖し、この辺りでは冬鳥とされています。さて、名前とその姿は何となく覚えていながら図鑑で検索したにもかかわらず見つけれなかったのは、カメラ脇の擁壁の天端に止まった状況を見て、地上性の鳥と思い込み、キツツキ科のページをスルーしたからです。また、これまで出会ったことがなく、身近な鳥と認識せず候補種として思いつきもしませんでした。

数十年前は、様々な情報は図鑑の絵図や写真、説明文の活字から得ていました。鳥の師の教えにより、いつでも見かけても種の特定ができるように!と暇があれば(財)日本野鳥の会発行の「フィールドガイド日本の野鳥」を基本に数種の写真集をあれこれ眺めては、ad.やyg.,撮影地、撮影日等の表示で成鳥と幼鳥の違いを比べ、どの地方に行けばこの環境でこの鳥が見られる、こないだこの鳥が来てたなあ、などと楽しみながら覚えていました。昨今、デジカメが普及し、フィールドで何枚か写真を撮っておき帰宅後パソコンで拡大して特徴がわかれば後から同定が容易にでき、生息環境などはネット検索で図鑑以上に様々な情報が簡単に得られます。それに甘えてどっぷり浸かってしまい、図鑑からも随分遠ざかっていました。思えば鳥の鳴き声を聞くのも以前はテープレコーダーで、目的の鳥にたどり着くまでにほかの種の声も聴く必要がありました。今はデジタルで、リストから目的の種

を選択すればダイレクトにその鳴き声を聞くことができます。世間で推進されるDXは必要な情報をピンポイントで効率的に得られる反面、その他の情報については以前のように付加的に得られず、広くいろんな情報を得るには意図的にその作業を行わなければならないことに気がきました。これを機会に様々な場面で少し原点に戻ってみようと思います。

(うえだ としひこ：津市久居一色町176-1)

蜘蛛いろいろ ―ゲホウグモ―

塩 崎 哲 哉

我が家のジャングルのような庭で毎夏見かけるクモがいます。ゲホウグモです。三重県内に広く分布するクモですが、活動するのが夜間に限られるため、なかなか目にすることが少ないクモです。コガネグモ科ゲホウグモ属に属するこのクモは体長15mm前後の比較的大型のクモです。また、腹部の斑紋や形態に変異の多いクモです。和名の外法蜘蛛の外法とは人の髑髏を用いて行う妖術の一種とのことで、クモの腹背の形や模様が外法頭（外法に使う髑髏）に似ていることから岸田久吉氏が命名されたとのこと。

夜間、林縁の樹枝間に横糸の間隔が非常に狭い垂直円網を張ります（写真1）。懐中電灯の灯りを当てると、まるで闇夜に浮かぶレコード盤のように見えます（レコード盤といっても、今の若い人にはわからないかもしれませんね）。主に夜間飛翔する蛾類を捕食しているようです。この網も明け方にはたんでしまいます。では、昼間はどのようにしているのでしょうか。昼間は木の枝に足を縮めてじっと止まっています。その姿はまるで木の瘤（こぶ）のように見えます（写真2）。こうなると普通の眼力ではとても見つけれません。クモは網をたたむとき、樹枝間に張り渡した橋糸（網を張るときに一番土台となる糸）を残しています。昼間この糸を見つけ、その付着点付近をたんねんにさがすことで、ようやく瘤に擬態したクモを見つけることができます。

産卵は、葉っぱの表面などに白色の糸でかがった卵のうを作ります、その表面を赤色やオレンジ色の糸でデコレーションしているのが大きな特徴です（写真3）。

ゲホウグモのように、夜間活動するクモも沢山います。夜の観察も楽しいものです。

参考文献

八木沼健夫・平嶋義宏・大熊千代子1990.クモの学名と和名。九州大学出版会、福岡、287pp.



写真1 レコード盤のような網を張るゲホウグモ



写真2 木の瘤に擬態するゲホウグモ



写真3 色のついた飾り糸をつけた卵のう

(しおざき てつや：御浜町下市木2338-1)

国道260号にもヨシススキが！

山 本 和 彦

ヨシススキはイネ科の大型多年生草本で、インド～東南アジアを原産とする外来種です、筆者はこれまで三重県南部にヨシススキが侵入し、現在分布を広げつつあることを報告してきました(本誌138, 139, 141, 143, 147)。今回は国道260号線沿いに生育しているヨシススキを取り上げました。国道260号線は紀北町と志摩市を結ぶ一般国道で、主に海岸沿いを走っています。日本の道100選にも選ばれている道路ですが、数年前からこの道路とここに繋がる県道573号沿いにヨシススキが出現しています。これまでに筆者がヨシススキを確認しているのは3箇所ですが(図1)、道路近辺には未確認の生育地があるものと思われます。以下に3箇所の生育状況について報告します(①～③は図1に対応)。



図1 国道260号線沿いで確認されたヨシススキ生育地。①紀勢南島トンネル東口～棚橋竈、②県道573号線沿い、③南伊勢町迫間浦

①紀勢南島トンネル東口～棚橋竈

大紀町錦の錦峠を越え、長さ1550mの紀勢南島トンネルを抜けると、道は南伊勢町の棚橋竈へと坂道を下っていきます。この坂道の道路脇や法面にヨシススキが点々と見られます。この坂道の道路は2015年2月15日に開通していますが、Googleストリートビュー(以下GSV)の2018年版ではヨシススキらしき植物が散見されます。2021年と2025年の画像から個体数は増加しつつあることが窺えます。

②県道573号沿い

県道573号は国道260号が通る大江から阿曾浦港までを結ぶ道路です。大江の入り口から道行竈までの間は2014年のGSVでは所々道路が整備されているようすが見られますが、大江地区の国道から県道への入口辺りはまだ以前のままで、どこにもヨシススキは確認できません。この入口付近が整備され県道全線の供用が開始されたのは2017年11月のことですが、その後の2021年のGSVには大江から道行竈までの間の道路脇や法面にヨシススキが写っています。さらに、道行竈の小河川や山裾の空き地にまでヨシススキが出現しているのが認められます。2026年5月現在、大江から道行竈の区間には500株を超えるヨシススキが繁茂していると推測されます。

③南伊勢町迫間浦

迫間浦の国道260号沿いの空き地端で、2025年10月に1株発見し(図2)、2026年5月現在も確認しています。GSVの画像を



図2 南伊勢町迫間浦の国道260号線沿いに生育するヨシススキ(2025年10月21日撮影)。

みると、この生育地は2018年頃までススキが茂る草地でしたが、2021年に整地され広い裸地が形成され、2023年には工事現場のプレハブの建物が建っています。ヨシススキがいつ頃侵入したのかは画像からは判別できませんでしたが、おそらく2021年以降かと思われます。

①、②のヨシススキは新しい道路が建設された後に出現していることから、道路建設に伴う法面緑化等に使用された草本類の種子にヨシススキの種子が混入していたものと推測されます。③のヨシススキは、風か自動車により運ばれた種子がたまたまこの造成地に落下し、根付いたのではないのでしょうか。
(やまもと かずひこ：尾鷲市小川西町8-40)

三重県レッドデータブック2025刊行

律儀に10年毎に改訂を行っている三重県のレッドデータブック2025年版が刊行されました。2025年版ですから2025年3月発行の予定でしたが、遅れること1年、たつぷりと編集・校正に時間をかけられたはずなのですが、編集作業は混迷を深め、校正指示は通らないという不思議があり、いまだに「正誤表」の作成中という状況です。事業開始当初に、三重県みどり共生推進課から「事務局的なことはしないでください」と言われているので極力口出しは避けましたが、イライラは募りました。不思議現象といえば、三重県総合博物館の学芸員先生たちがまったく参画していないことで、全国的にはレッド七不思議とさえいわれていました。ことの真相を知るべく双方からお話を聞いたところ以下のことがわかりました。

事業開始時にみどり共生から博物館に協力依頼→博物館は事務局業務も含めて（いわゆる丸投げ）の依頼と判断し拒否→以降はみどり共生から博物館への働きかけなし→各部会長から学芸員に個別で協力依頼があるも公的ではないので参画できない、というのが学芸員の言い分。みどり共生が本当に丸投げを依頼したのか、公的依頼があったら学芸員は実際に参画したのか、今となっては検証不能ですが、次回改訂のためには博物館の方針をはっきりさせておくことは重要です。この事業には当会会員も多く参画していますが、私も含めて経年劣化の進行で次回はないでしょう。現状で期待できる組織は博物館だけですが、同館が地域自然誌の解明、生物多様性保全のために活動する意思があるのか、みどり共生に確認してもらっています。その気のない組織に期待するのは無理筋ですので、その場合は県生物多様性センターの整備が急がれます。

(清水善吉：松阪市日丘町1386-17)

編集後記

坂手島のアヤメ池には思い出があります。10年ほど前、ネズミ調査で集落付近からアヤメ池方面に罠を設置していると、20代と思しき女性が一人で池に来ているのに出会いました。当然警戒されますので、積極的にこちらから話しかけ、植物が好きなんですかと尋ねると、カントリーライフを楽しみに来ましたとの返事でした。どちらからと聞くと、松阪市新町とのことで、あそこはアーバンだったのかと気づかされました。ちなみに、今号で蝶について報告されている中西元男さんも同所です。次号は9月発行予定ですので、お気軽にご投稿下さい（善）。

自然誌だより148号 Mie Natural History Research Group News, No.148

発行日 2026年6月19日

事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17

清水善吉方 三重自然誌の会

<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会

郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会

年会費 1,500円（個人）/2,000円（家族）

e-mail:shimizuzenkichi@gf7.so-net.ne.jp